

子どもたちに 心の豊かさを与えます



松本 喜代さん
(横山町一丁目・82歳)

触れ合いが生きがい

時代とともに生活様式も変わり、子どもの生活も変わってきています。たこ揚げや羽根つき、ベーゴマなど昔ながらの遊びを見かけることが少なくなりました。おやつのお菓子も豊富になっています。

川越市は、“小江戸”と呼ばれ、蔵造りの町並みをはじめ江戸の下町の面影が残り、お菓子横町など観光客でにぎわっているそうです。そこで今回は、横山町で60年余駄菓子屋を営んでいる松本喜代さんを訪ねました。

「浅草生まれで実家も商売をしていました。結婚して古河にきて義父がせんべい屋をやっていたので引き継ぎ、駄菓子も始めたんです。子どもを6人授かりましたが、商売をしていたのであまり手をかけることができませんでした。そのせいか、洗濯など自分のことは自分でやるようになり自立心が強くなりましたね。」

お店の前に医院があるので、親がむずかる子ども

ぶんがくかん発
Vol.170

楽しきかな読書 - 小説の中のわがまち「古河」-

ここに発行ほやほやの1冊の文庫本があります。宮本昌孝著『義輝異聞 将軍の星』(徳間文庫・2003年5月15日初刷)

著者の宮本氏は1955年、静岡県浜松市生まれ。日本大学芸術学部卒業後、1987年「失われし者タリオン」で作家デビュー。出世作となった1995年発行の『剣豪将軍義輝』をはじめ、数々の歴史・時代小説を発表。時代小説で一世を風靡した故・隆慶一郎の作品を彷彿とさせる作風で、今後もより一層の活躍が期待される作家の一人です。冒頭の『義輝異聞 将軍の星』も『剣豪将軍義輝』の後日譚を中心とし、足利将軍家の衰亡を描いた短篇集ですが、その中で表題作となっている作品が、古河を舞台に描かれているのです。主人公の室町幕府13代将軍足利義輝が、お忍びでの諸国漫遊中に、古河公方・梅千代王丸(のちの義氏)を巡る騒動に巻き込まれるという設定で物語は進みます。

ところで、『万葉集』にも登場する古河は、『南

総里見八犬伝』はじめ古典から近現代作品に至るまで、数多くの作品の舞台として描かれてきました。とりわけ歴史・時代小説の分野で多くの作品に「古河」が登場します。森鷗外『大塩平八郎・堺事件』、司馬遼太郎『箱根の坂』、井上ひさし『四千万歩の男』、佐江衆一『クイーンズ海流』、また以前本欄でも紹介しま



総合公園内にある古河公方が開基した徳源院跡

したが、市川麻里子『天保の雪』、乙川優三郎『冬の標』などなど。そこでは、古河公方が、鷹見泉石が、あるいは奥原晴湖が描かれています。

これらの作品を読むにつけて、古河の持つ「歴史」に今さらながら、驚きと誇りを感じずにはいられません。まさに「歴

史のまち」古河の面目躍如といったところでしょうか。

読書にはいろいろな楽しみ方がありますが、自分の住んでいる町が描かれている作品を探してみるのもまた一興です。そんな作品を探し当てたときの、何ともいえぬ満足感…。古河はそんなささやかな喜びを感じさせてくれる町でもあるのです。